

野家先生「私の転換点：物理学から哲学へ」への質問・コメント	野家先生からの回答またはコメント
講義内容について	
<p>(※水野先生へも) おふた方の内容と重複していたので、両方にチェックを入れさせていただきました。どちらも専攻を変更されていますが、やはり、一度決めた専攻をかえるのは相当な判断や決断が必要かと思われます。そのあたりはどのようにお考えでしたか。(私は今のところ専攻を変える予定や意思はないのですが、率直に気になりました。)</p>	<p>そうですね、かなりの決断が必要であったことは事実です。ただ、講義でも話しましたが、当時は社会も大学も激動の時代でしたので、それと共振して「ここがロードスだ、ここで跳べ」という気持ちになっていたというのが正直なところですよ。それと、多少の冒険をしても、若い年代(20代)ならば、いくらでもやり直しはきくものです。</p>
<p>野家教授が大学で勉強していた時代が今の平和な時代しか知らない私にとってはあまりにも激動の時代でおどろきました。その世間に対して教授が何を考えて生きていらっしゃったのかとても気になります。物理学という学問から、一転して哲学の研究の道へ進もうと決意したことは教授にとってある意味運命だったのだと思います。そんな先生に出会い、講義を受けていることは私の運命なのかもしれないと思いました。私なりに自分の転換点をきちんと見つけていきたいです。</p>	<p>私が大学に入学したのは1967年、当時の大学進学率は男性20%、女性5%に過ぎず、中卒で就職して行った友人たちも多かったです。それだけに、自分がエリートであることの自覚と負い目があり、社会の格差や権力の横暴に対する憤りも強かったと言えます。そうした社会的・政治的関心が、私の場合は理系から文系への転換につながって行きました。現代には現代の転換点があるものです。皆さんがそれを見つけ、自分なりに格闘されることを期待しています。</p>
<p>私は、地球科学専攻なのですが、「時間とは何なのか」とか、「平行宇宙」にとっても興味があります。正直、院から、物理学専攻に変えたいとも思っていたのですが、今日のお話を聞いて、哲学という世界に少し興味がわきました。天文や時間の哲学とは具体的にどのようなことをするのですか。</p>	<p>哲学的時間論にも二つの流れがあります。一方は物理学を基盤とした客観的時間論、他方は人間の時間意識を中心にした主観的時間論と言えます。前者については渡辺慧の『時』(河出書房新社)や『時間の歴史』(東京図書)、後者については滝浦静雄『時間』(岩波新書)や植村恒一郎『時間の本性』(勁草書房)などを読んでみてください。</p>
<p>科学哲学とはなんですか。</p>	<p>科学の方法論や科学的認識の構造、科学と社会の関係などを探究する学問です。くわしくは拙著『科学哲学への招待』(ちくま学芸文庫)を読んでみてください。</p>
<p>今まで私は哲学は文系だと思っていたのですが、先生の授業を受けて哲学は理系の要素も多く、文理で分けるものではないなと思いました。</p>	<p>もともとニュートンの時代までは、科学は「自然哲学」と呼ばれていました。哲学は文理双方の要素をもっており、文系/理系という分け方に当てはまらない学問です。</p>
<p>物理学と哲学は正反対の学問であるような気がしていたので物理学から哲学へ変更するのは相当な決意があったのではないかと思います。物理学を勉強した経験が哲学の学びに役立ったと思うことはあるのでしょうか。</p>	<p>講義中に回答しましたが、「数式コンプレックス」を持たずにすんだ、というのが物理学を学んでよかったことの第一です。私の専門は「科学哲学」という分野ですので、そもそも自然科学の知識がなければ成り立ちません。その点では、物理学を学んだことは今でも役立っています。</p>
<p>物理学から哲学という、私にはとても遠い分野に思える転換のお話が参考になりました。</p>	<p>参考にいただければ幸いです。でも、あまり真似はしないでください。</p>
<p>いつも野家教授の授業を受けていましたが、トマス・クーン氏に出会っていることを知り、とても興奮しています。あのパラダイムシフトを唱えたクーン氏の思想を間近で体感できることはとても素晴らしいと思います。</p>	<p>クーン先生には私がプリンストン大学に留学している時にお目にかかりました。東北大にも講演に来ていただき、私の車で松島を案内したことがあります。詳しいことは拙著『パラダイムとは何か』(講談社学術文庫)を読んでいただければ幸いです。</p>
<p>先生の師匠であった Thomas S. Kuhn の科学パラダイムに対する考え方を、今の野家先生はどう思っていますか？今も有効な考え方ですか？</p>	<p>修正は必要でしょうが、今でも有効な考え方だと思っています。私のパラダイム論に対する評価は、上記の『パラダイムとは何か』を読んでみてください。</p>

物理から哲学という、一見全く違う分野への転換という事で、とても興味深かったです。学び続ける上でやはり、師という存在は大切か、気になった。(自分が学びたいことが学べればそれでいいと考えていた)	学問をする上では「師の背中を見て学ぶ」ということが何よりも大切です。私の場合は大学院で哲学を教えて頂いた大森荘蔵、廣松渉の両先生、留学したプリンストン大学で指導いただいたリチャード・ローティ、トマス・クーンの両先生の影響ぬきには、現在の私はないといっていいほどです。
自分の理想論とのギャップを自ら埋めようとするということがすごいと思いました。	自分では特にすごいことをしたとは思っていませんが、悩みながら考え抜いた結果が、こうなったということです。
哲学について少し興味を持つことができた。	それは何よりです。
本に沿って説明が行われていてとても興味深かった。	紹介した本を皆さんも手に取っていただければ嬉しいです。
転換点の大事さを実感した。	いつの時代にも、見つけようと思えば転換点はあるものです。
転換期間は重要であり、そのために、前にやってくれることが大事だと思った。	「前にやってくれる」の意味がいま一つつかめませんが、転換点を生き抜くためには、それなりの準備と努力が必要であることは確かです。
1968は「無数の問いの噴出の時代」と仰いましたが、どの国でも理想に燃える学生による、旧体制の腐敗した現実に対する反発であるという評価が一般的だと思います。しかし今、この革命によって生まれた成果が否定されつつあります。(例：トランプや右派勢力による反国際主義・自国第一主義)もしかしたら私たちは先生方と本質的に同じような転換点に生きているのかと思います。私たち学生は社会や自分のため、平和に生きればいいのでしょうか？右傾化の時代に逆らうべきでしょうか。	私たちの世代(団塊の世代)は私たちが理想をもって社会を変革しようと動いてきましたが、皆さんの世代には皆さんの理想があるだろうと思います。その理想と現実とのギャップが大きいとすれば、皆さんもまた転換点を生きているのだと言えます。そこでどのような道を選択するのかは、皆さんなりに考え、議論し、見つけていくほかはありません。とりわけ現代は基本的人権や「自由・平等・友愛」という近代社会の理想に対するバックラッシュの時代です。困難はむしろ私たちの時代よりも大きいでしょうが、皆さんの賢明な選択を期待しています。
1968年に国内外では様々なことがあり、とても印象に残りました。学生運動と三島由紀夫の割腹自殺をもっと知りたいと思ったので、ネットで調べようと思います。	三島事件は私が大学四年生のときに起きました。ニュースで知り、昼食をとっていた箸をショックで取り落としたことを覚えています。ネットも結構ですが、保坂正康『三島由紀夫と盾の会事件』(ちくま文庫)を読むことをお勧めします。
(※山口先生へも)大学在学中(学生運動中)にお互いに対し(運動参加者/非参加者)どのように思っていましたか？	私は「ノン・セクト」と呼ばれるグループに属していましたので、「セクト(党派)」に属する学生には、党派の言葉でなく自分の言葉で語ってほしいと批判的でした。また「ノンポリ」の学生に対しては、もっと社会的・政治的関心を持って議論に加わってほしいと思っていました。
留学はやはり1年ほど行った方が実りあるものになりますか？	そうですね、最低でも一年のサイクルを経験することが、その後いろいろな意味で役に立つと思います。
物理と哲学の違いとはなんですか。昔は数学、物理屋は哲学者と呼ばれており、今は違います。具体的な線引きなどはありますか。そもそも哲学とはなんですか。	物理学はもともと「自然哲学」と呼ばれていましたので、宇宙と人間の根本原理を究明したいという動機と目標は哲学と同じです。ただ、17世紀以降はその方法論が違ってきました。哲学とは、あらゆる物事を根本から考え直す営みだと言えます。
物理から何故哲学にいったのかは、前々から気になっていたもので、とても面白く聞けました。私のもとめているものがそこになら別場所へ移動するというのもとても勇気のいることではあると思いますが、物理をすてる選択にはどれほどの思考をかけたのでしょうか？	私は物理を「すてた」つもりはまったくありません。私の問題関心の延長線上に哲学があった、というのが正直なところですよ。
物理学から哲学へ転身されたと思いますが、物理学を学んだことを無駄だったと感じたことはありますか。学ぶことに無駄ということはないのでしょうか。	無駄どころか大変有益だったと思っています。物理学を学ばなかったなら現在の私はありません。学問に「コスパ」を求めるのは邪道で、学ぶことに無駄はいっさいありません。

物理学から哲学へというのは、かなりジャンルが違うと思うので、すごいと思いました。	先の質問にも答えましたが、物理学は自然哲学から生まれたものですので、もともとジャンルは一緒でした。
物理学から哲学への転換はすごく衝撃的でした。	自分ではそれほど衝撃的だとは思っていませんでしたので、このような質問があること自体が私にとっては衝撃的です。
先生の転換点となった本は、そうなる期待を持って読んだものなのか、それとも思いがけず出会ったものなのかが気になります。またこの2つで、先生がそうであったものでない方が、転換点になることはあると思いますか。	両方です。細菌学者のパスツールに「幸運の女神は常に準備している人にもみ微笑む」という言葉があります。明確に意識はしてはなくても、潜在的に準備や期待があつてこそ、思いがけない「出会い」は生じるものです。
1968年は歴史で習うような昔のことという感じと、先生などから当時の話を聞ける最近のことという二重の感じ方があると思った。	皆さんには歴史でしょうが私にとっては体験してきた現実です。最近では1968年に関するさまざまな本が出ていますので、それを読んで「追体験」してみてください。
物理学を学んできたことに後悔はないとおっしゃっていましたが、逆にこれを学んでおけば良かったというものがありますか？	物理学の研究には英語しか使いませんが、哲学の研究にはギリシア語やラテン語をはじめさまざまな言語が必要です。もう少し語学をしっかりと学んでおけばよかったと思います。
転換点のキッカケとなる本と出会うコツはありますか。	コツはありません。多読、乱読あるのみです。
50年前には革命運動が盛んだったということですが、日本の50年前の学生と現代の学生のちがいは何なのだろうと考えさせられました。	当時はアメリカの侵攻によるベトナム戦争激化やソビエトによる東欧への軍事的介入などに対し、世界的に反戦運動が盛り上がっていた時代です。学園闘争はそうした抑圧的な現体制に対する「異議申し立て」の運動であったと言えます。
講義内容以外について	
哲学において、思いつきの思想、哲学とそうでない思想、哲学は何がちがうのか。思想と哲学のちがいは何か。	芭蕉に「不易流行」という言葉がありますが、思想はどちらかといえば時代に応じた「流行」の側面をもち、それに対して哲学は変わることのない「不易」な問題の追究だと言えるでしょう。
物理学と哲学の共通点は何ですか。	宇宙や人間の本質について理性的に解明することです。
哲学に関してかどうかわかりませんが、神の有無に至って先生はどうお考えでしょうか。	神にもいろいろありますので、一口には言えません。私は人格神の存在は信じませんが、人間を超えた自然神（汎神論）のようなものには共感をもっています。
何かに熱中するには？	まだ経験したことのない、様々なことにトライしてみることです。
質問の回答中にあった「人間のアイデンティティ」という言葉はとても重要だと感じた。	とりわけ AI によるシンギュラリティやゲノム編集が現実のものとなる現代においては、きわめて重要な概念です。
村上陽一郎先生や大森荘蔵先生と研究していたというのは羨ましいです。素晴らしい先生や仲間というのは大切だというのは思います。	素晴らしい先生や仲間は東北大学にもおられますので、皆さんもその「出会い」を大切にしてください。
先生方が研究者としてのポストを得ることが出来たのは偶然によるものが多かったのか、もしくはある意味必然的なものであったのか、気になりました。	私の考えでは、大学院を出て得られる最初のポストは、かなり偶然に左右されます。そこから、より研究環境のよい二番目以降のポストが得られるかどうかは実力による必然的なものです。
自分の良き「転換点」となるきっかけを掴みとるために実践してきたことはあるでしょうか。	目の前にある課題に全力で取り組むこと以外にはありません。
今日、欧米を中心に過激的ともいえる民族主義が台頭しているが、「Nation」という概念が存在し、我々が意識的・無意識的にそれを認める以上、人類はこの進退を繰り返すのか？	講義でも話したかもしれませんが、「国民国家（Nation-State）」という概念ができたのは、ヨーロッパではナポレオン戦争以後のことです。日本でも明治以前はそれぞれの藩が「くに」でした。その枠組みを打ち破ろうとしたのが EU ですが、イギリスの離脱などで雲行きが怪しくなってきました。民族と宗教という壁は、21世紀が乗り越えるべき最大の課題ですが、残念ながららどのような解決の道がありうるのかは私にもわかりません。